

主の公現・B年 (15.1.4)

「行って、その子のことを詳しく調べ 見つかったら知らせてくれ」

主の公現祭の由来

最初に、今日の祭日の由来を、簡単に説明したいと思います。

まず、この祭日は、4世紀ごろにエジプトの教会から始まったようであります。そこで、この祭日には、「イエスの洗礼」と、「イエスの誕生」を同時に祝ったのであります。さらに、イエスの最初のしるし、つまり、カナの婚礼の席上、水を上等なぶどう酒に変えた奇跡をも、祝っておりました。

ところが、後に、西方教会が、降誕祭を採用するにあたって、「みことばが人間とされた」という主題を、12月25日に移したことにより、1月6日は、イエスの洗礼を主題にするようになったのであります。

さらに、4世紀後半になりますと、公現祭は、東方教会のみならず西方教会にも普及し、ローマでは、すでに定着していた主の降誕祭と並行して公現祭が祝われるようになったのです。

実は、エルサレムでは、本来、1月6日に、まず、ベツレヘムの真夜中のミサでイエスの誕生を祝い、その後、エルサレムまで行例しながら向かったのであります。さらに、ローマでは、占星術の学者の礼拝を中心に、1月6日に公現祭を祝い、その8日目の1月13日にイエスの洗礼、その後の日曜日にカナの婚礼での出来事を、それぞれ別個に祝うようになりました。

そこで、1月6日の公現祭は、「三人の聖博士の礼拝の日」として定着したのであります。この三人というのは、マタイの福音書によるのではなく、教父オリゲネス（185-254）によって、三つの贈り物、すなわち黄金、乳香、没薬がささげられたことから、三人となったのであります。そして、その後、この三人の学者たちは、王様にされて、名前がバルダザール、

メルキオール、カスパールと付けられました。それだけでなく、1164年には、なんと彼らの聖遺物までもが、イタリアのミラノから、ドイツのケルンまで運び移され、このケルンの大聖堂に豪華に飾られています。

メシアであるイエスを告げ知らせる

それでは、今日祝う公現祭のテーマは、^{なん}何でしょうか。

とにかく、すでに祝ったメシアの誕生の、ベツレヘムの家畜小屋でいとも貧しく、質素な出来事に比べ、遠い東の国からこの生まれたばかりのメシアを拝みに、贈り物をたずさえてはるばるやってきた、三人の学者たちに焦点を当てて見ましょう。そこで、彼らに向かって命令したヘロデ王の次のような言葉に今日の主題が、見事に要約されているのではないのでしょうか。

「行って、その子のことを詳しく調べ、見つけたら知らせてくれ。」

ですから、わたしたちも、この新しい年に、イエスのことを、改めて詳しく調べ、それを、今年一年間に会い、関わる一人ひとりに知らせるという宿題をもらうことではないのでしょうか。つまり、教会の本来的使命である、福音を宣べ伝えることに専念することにほかなりません。

実は、この福音宣教について、教皇フランシスコは、熱のこもった指針を、その使徒的勧告『福音の喜び』で打ち出しておられます。

「神のことばには、信仰者たちを呼び起こそうとして『行け』という言動力が常に現れています。アブラハムは、新しい土地へと出て行くようにという呼びかけを受け入れました。モーセも、『行きなさい。わたしはあなたを遣わす』という神の呼びかけを聞いて、イスラエルの民を約束の地に導きました。

・・・^{きょう}今日、イエスの命じる『行きなさい』ということばは、教会の宣教の常に新たにされる現場と挑戦を示しています。皆が、宣教のこの新しい『出発』に招かれています。・・・つまり、自分にとって^{いごこち}居心地のいい場所から出て行って、福音の光を必要としている隅に追いやられたすべての人に、それを届ける勇気をもつよう招かれています。」（20 項）

わたしたちは、この一年の間、福音を特に必要としているイエスの兄弟である小さき人々、つまり、心身ともに病んでいる方々、弱い立場に置かれている方々、独り暮らしのお年寄りの方々を訪問し、その会話のなかで、さりげなくイエスを紹介できるのではないのでしょうか。

サマリアの井戸端で、イエスに感動的に出会ったサマリアの女も、イエスが誰であることを悟ったとき、一目を避けてひっそりと生きて来たそれまでの生活をかなぐり捨てて、どうどうと人前に出て、イエスを知らせることができたのです。福音記者ヨハネは、福音宣教者になったサマリアの女の体験を、次のように伝えています。

「女は、水瓶をそこに置いたまま町に行き、人びとに言った。『さあ、見に来てください。わたしが行ったことをすべて言い当てた人がいます。もしかしたら、この方がメシアかもしれません。・・・さて、その町の多くのサマリア人は、『この方が、わたしの行ったことをすべて言い当てました』と証言した女のことばによって、イエスを信じた。』」
(ヨハネ 4.28-39)

若し、わたしたちも、飼葉桶に寝かされているメシアであるイエスを、見つけることができたなら、この女のように、人びとにイエスを知らせることができるようになるのでしょうか。

教皇フランシスコは、続けて次のように励ましておられます。

「現代の教会が、あらゆる人に、あらゆる場所で、あらゆる機会に、ためらうことなく、嫌がることなく、恐れることなく、福音を告げるために出向いて行くことは重要です。・・・『出向いて行く』教会は、宣教する弟子たちの共同体です。彼は、率先する人、かかわり合う人、寄り添う人、実りをもたらす人、そして祝う人です。・・・福音を宣教する共同体は、行いと態度によって他者の日常生活の中に入っていく、身近な者となり、必要ならば自分をむなしくしてへりくだり、人間の生活を受け入れ、人びとの中で苦しむキリストのからだに触れるのです。」 (同勧告 23-24)

確かに、教会は誰でも入って来られるまさに安らぎの場にならなければなりません。と、同時にミサの度毎に、それぞれの家庭、職場、地域に派遣されていく共同体でもあります。ですから、教会のドアは、誰でも気軽に入れるように、いつも開けておくのと、同時に出かけに行くために扉を広く開くのであります。ですから、イエスはミサをとおして、いつもわたしたちを、次のようなおことばによって派遣しておられるのです。

「あなたがたがわたしを選んだのではない。わたしがあなたがたを選んだ。あなたがたが出かけて行って実を結び、その実が残るようにと、また、わたしの名によって父に願うものは何でも与えられるようにと、わたしがあなたがたを任命したのである。互いに愛しあいなさい。これがわたしの命令である。」（ヨハネ 15.16-17）

さらに、わたしたちの宣教活動は、いつも主と共に実践することにほかならないことを、福音記者マルコは、次のように確認しています。

「弟子たちは、出かけて行って、至るところで宣教した。主は彼らと共に働き、彼らの言葉が真実であることを、その伴うしるしによってはっきりとお示しになった。」（マルコ 16.20）